

2.7_3

(3) インターンシップ

2023 年度も 2022 度に引き続き、工学部の全学科でインターンシップが実施された。表 1 は、各学科が授業科目として単位認定しているインターンシップ科目の一覧である。インターンシップに参加し、各学科で定めた条件を満たした学生には、これらの科目の単位が認定される。インターンシップの評価方法としては、レポート提出や実施報告書提出及び業務日誌等で行っている。派遣者数を表 2 に示す。合計欄の括弧書きの数値は、参考のために 2022 年度の派遣者数を示したものである。今年度の希望者数は学科により大きく傾向は異なり、材料応用工学科の化学系では前年度 1 人から今年度 86 人と大幅に人数が上昇したが、土木建築工学科の土木系では 48 人から 26 人とおよそ半減、情報電気工学科ではコロナ禍中と変わらず今年度も 4 人と低い人数である。

2023 年 5 月からコロナも 5 類に引き下げとなり、各学科での企業見学の実施が復活したところが多かったようである。企業側も 2020 年以降のパンデミックをきっかけに、オンライン形式のインターンシップが一般的になっていたが、2023 年には対面での実施も復活し、オンラインとオフラインを組み合わせたハイブリッド形式が多く見られた。これにより、学生は物理的な距離に関係なく参加できる柔軟性が提供される一方、対面での交流や職場体験の機会も得られるようになったようである。昨年度同様、インターンシップの報告会各学科で開催し、インターンシップ参加の機会が得られなかった学生を含め、体験や情報が共有されたようである。

コロナ以前も授業科目としてのインターンシップ参加者が減少していたが、この背景には、企業が夏休み以降（授業期間）に実施している会社見学や 1-DAY インターンシップの増加があったが、2023 年度もその傾向が強かったことは否めない 2018 年に日本経済団体連合会（経団連）が従来の「採用広報活動の解禁日」を設定しない方針に転換後、インターンシップを就職活動と直結させる企業が増加した結果、夏季インターンシップの平均日数は 1 週間以内、あるいは 3 日程度の短期プログラムが一般的となっている。学生にとっても少しでも早く就職活動を始めたいという思いがあるため、短期のものに複数回参加したが、大学が目的とする長期のインターンシップは敬遠されつつある。さらにインターンシップに参加すると就職試験時に有利であるとの情報が広がっており、就職先として考える企業以外への参加を渋る傾向もみられ、また授業よりもインターンシップを優先する学生が出てきていることも事実である。このような状況は、大学生の本分を曲げ、また学生の視野を狭めることにもつながり、深く仕事について知ることを妨げることになることを懸念する。今後もインターンシップの本来の意義を学生に伝えると共に、企業に対しても教育効果の高い最低 2 週間をかけたインターンシップの実施を依頼する必要性がある。

表1 2023年度 各系学科のインターンシップの授業科目

学 科 名	プログラム名	授業科目名	必修・選択 科目	単位数
土木建築学科	土木工学教育プログラム	インターンシップ	選択	2
	地域デザイン教育プログラム	インターンシップ	選択	2
	建築学教育プログラム	インターンシップ	選択	2
機械数理工学科	機械工学教育プログラム	インターンシップ	選択	2
	機械システム教育プログラム	インターンシップ	選択	2
	数理工学教育プログラム	インターンシップ	選択	2
情報電気工学科	電気工学教育プログラム	インターンシップ	選択	2
	電子工学教育プログラム	インターンシップ	選択	2
	情報工学教育プログラム	インターンシップ	選択	2
材料・応用化学科	応用生命化学教育プログラム	インターンシップ	選択	2
	応用物質化学教育プログラム	インターンシップ	選択	2
	物質材料工学教育プログラム	インターンシップ	選択	2

表2 2023年度 工学部インターンシップ実績表 ()は2022年度の数

学 科 名	プログラム名	派遣者数
土木建築学科	土木工学教育プログラム	26(48)
	地域デザイン教育プログラム	62(55)
	建築学教育プログラム	
機械数理工学科	機械工学教育プログラム	17(9)
	機械システム教育プログラム	0(0)
	数理工学教育プログラム	
情報電気工学科	電気工学教育プログラム	4(2)
	電子工学教育プログラム	
	情報工学教育プログラム	
材料・応用化学科	応用生命化学教育プログラム	86(1)
	応用物質化学教育プログラム	46(25)
	物質材料工学教育プログラム	
合 計		241(140)